

『耳をすませば』における支援のありかたに 関する心理臨床学的探求の試み

小 山 智 朗

要 約

本稿の目的は、アニメーション映画『耳をすませば』（スタジオジブリ制作・東宝配給）を題材に、主人公の中学生・雫の成長と、それを支えた周囲の支援のありかたについて心理臨床学的な視点から検討をおこなうことである。

思春期は、子どもから大人へと大きく転換する激動の時期であり、いわば子どもの自分を壊し、大人の自分へと作りかえるスクラップアンドビルドの時期である。彼らは、理想と現実の狭間で不安定になりがちであるにもかかわらず、反抗期を迎え大人には素直に悩みを相談できなくなる。そうした思春期の子どもたちに、われわれはいかに関われば良いのだろうか。

映画の中で、雫は物語を書く夢を抱きつつも、才能に不安を感じ、また限界に直面して落ち込んでしまうことがあった。そんな苦悩する雫に対する周囲の関わりを心理臨床学的に読み解いていくことで、思春期の子どもたちへの支援の一助となると考える。

1. はじめに—『耳をすませば』とは—

本稿は、アニメーション映画『耳をすませば』（スタジオジブリ制作・東宝配給）を題材に、主人公の中学生の少女・雫の成長と、それを支えた周囲の支援のありかたについて検討をおこなうものである。

『耳をすませば』は、1989年に『りぼん』（集英社）に連載された柊あおいのマンガ作品を原作とし、1995年に監督：近藤喜文、脚本：宮崎駿によ

って映画化された。

では、なぜ本稿で『耳をすませば』を取り上げるのか。理由は単純。『耳をすませば』は、思春期の心模様や成長プロセスが見事に描き出されているからだ。宮崎駿(2015)が述べるように、「現実をぶっとばすほどの力のあるすこやかさ」が全編に亘って展開している。いわば、どこを切っても新鮮な果汁が滴り落ちる柑橘類のような、“This is the きらきらの青春映画”なのだ。

物語は、雫と同級生の天沢聖司とのピュアで甘酸っぱい恋愛を主軸に展開していく。ただ、ありがちな恋愛物語には回収されず、雫の成長物語がもう1つの隠された軸となっている。いわば恋模様が主旋律に、雫の成長プロセスが副旋律となって展開していくのである。もちろん2人の恋の行方や雫をめぐる三角関係などに焦点を当てて論じることもできよう。しかし、心理臨床家としての筆者にとっては、1人の悩める少女の心の成長がいかにかたされたかという点にやはり大きな関心がある。本稿では、雫の成長を支えた周囲の関わりに焦点を当てて論じてみたい。

「しかしまあ、随分と古い作品を持ち出したものだ」。そんな声が聞こえてきそうである。確かに、ここ数十年の間に社会は大きく発展し、われわれを取り巻く環境は激変し、科学技術、社会制度、思想などあらゆる面で大きく変貌を遂げた。

それは、自己のありかたにも影響を及ぼしていく。広沢(2015)は、人格に中心があり、統合性や一貫性を備えた「放射型人間」ではなく、現代においては場面や状況ごとに異なる自己像を示し、一貫性や統合性に乏しい「格子型人間」が優位を占めつつあると指摘する。また田中(2017)も、「自己関係」が成立し「自己意識」をもちうることを「サイコロジカル・インフラ」と呼び、それが21世紀に入り「集合的なレベルではもはや消失しつつある」と述べている。このように自己のありかたは、社会の変化に伴って大きく移り変わった。

それでは、心自体はどうだろうか。例えば1000年以上前の平安時代は、

『耳をすませば』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

現代とは社会のありかたは大きく異なっている。しかし、その時代に生きる人々の和歌や物語をつぶさに見るなら、そこには、現代と相通じる生々しく人間臭い心模様が繰り広げられていることが分かる。もちろん、当時と現代は社会はもちろん世界観や宗教観など同じ国とは思えないほど変わり、文字通り隔世の感がある。しかし、恋の喜びや失恋の苦しみ、死別の哀しみや痛み、また昇官を逃した悔しさや怒り、嫉妬などといった基本的な心のありようは、時代によってほとんど変わってはいない。ましてや『耳をすませば』は30年前の作品である。筆者はもちろん、授業で視聴した現代の学生たちの心も大きく動かしており、今もその輝きを保っていると思われる。実際、本作は昨年(2022年)に実写映画化までされており、この作品が現代を生きる人の心に響くことの何よりの証明だと言えるだろう。ここで、初めて耳にしたという読者のために、あらすじを紹介する。

2. あらすじ

主人公は、中3の月島雫(つきしましずく)。東京郊外の団地に、両親と姉の4人で暮らしている。雫は、明るく読書好きな女の子である。中3になって周りは受験勉強一色なのに、勉強をする気になれず、本を読みふける毎日を送っていた。そんな雫は、借りようと思う本の貸し出しカードに、決まって「天沢聖司」という名前があることに気付き、どんな人なのか漠然と憧れを持つようになる。

ある日、初めて会った少年に「カントリーロード」をもじって戯れに作った「コンクリートロード」の歌詞を揶揄され、「やなやつ」だと思ふ。

その数日後、雫は図書館に向かう途中で一匹の不思議な野良猫(ムーン)に出会う。ムーンに導かれるように小高い丘の上にある「地球屋」という素敵な古道具屋に誘われ、店主の西司朗というおじいさんと知り合いになる。

後日、地球屋に遊びに来たときに、先の少年と出会う。実は、彼こそが

天沢聖司であり、しかも西司朗の孫であると判明し、雫はその偶然に驚くのがあった。聖司は、中学卒業後、バイオリン職人になるためイタリア留学を決意しており、日々制作に励んでいた。雫は、夢に向かって一途に頑張る聖司に少しずつ惹かれるようになる。

ただ雫は、ひたむきに努力する聖司を目の当たりにすると、夢や目標がなく、何も頑張っていない自分に引け目も感じるようになる。しかし、親友の夕子や西司朗(聖司の祖父)らの関わりもあり(この関わりについて後に詳述する)、自分も聖司に追いつけるよう、憧れていた物語の執筆を決心する。司朗に、パロン(地球屋にあった猫の男爵人形)を物語の主人公にして良いか許しを請うと、「ほくを、雫さんの物語の最初の読者にしてくれること」という条件で認めてくれるのがあった。

雫は、自分の才能に不安を感じ、時に書けない苦しみを体験しつつ、物語の執筆に打ち込んでいく。ただ、そのせいで受験前の中間テストの成績はガタ落ちになり、驚いた母や姉に咎められてしまう。しかし、図書館で頑張る雫の姿を見ていた父親は、もう少し雫のしたいようにさせようと執筆を認める。

それからの雫は、昼夜を忘れるほど執筆に没頭する。ある日、図書館で小説の下調べをしていると、聖司が現れ暫くイタリア修行に向かうことを告げる。別れ際、2人で互いに頑張ることを誓い合う。

雫は、やっとの思いで物語を完成させ、約束どおり西志朗に物語を見せに行く。司朗の感想が不安で待ちきれない雫は、寒空のもと凍えながら、司朗が読み終わるのを待つのがあった。

それでは、雫の歩む足音に「耳をすませば」何が聞こえてくるのだろうか。ここから考察に取り掛かろう。

3. 物語のはじまり

1) 流れに添って

物語は、幕が開いても暗いままである。一瞬視聴者に軽い戸惑いを与えるが、暗闇だと思っていた映像には実は光が混じっており、どうやら大都市の街並みを俯瞰していることが分かってくる。オリビア・ニュートン・ジョンの“Take Me Home, Country Roads”の歌声が流れ出し、視聴者を「懐かしさ」の感慨へと優しく誘っていく。

カメラは、そのままゆっくりパンニング(水平移動)されるが、どこまでも夜景は続き、この街(東京)の大きさが巧みに印象付けられる。遠くに高層ビル群が瞬き、下方にティルト(垂直移動)されると、そこには車列や走る電車が光って見える。

ここからカメラは地上に降りる。下町の駅(モデルは京王線沿線)が映し出され、混みあった電車から解き放たれた人の群れは、駅横の踏切りを通過して家路に向かう。雑然とした下町の風景であるが、行き交う人々に緊張感はなく、仕事を終えた安堵感からだろうか、和やかな空気が感じられる。

ここでカメラは、普段着の中学生くらい女の子が、コンビニで買い物をしているのを捉える。服装を気にする「お年頃」の女の子が、飾り気のない普段着でいることから、おそらく住まいが近所であること、また買った物が牛乳ということでお使いを頼まれたのであろうこと、さらにお使いに応じてあげるような気の優しさ(あるいは切迫した家の事情)があることが、勘の良い視聴者には気づかれることだろう。

カメラは、家路に向かう女の子に合わせてトラック(移動撮影)していく。それにより「この子が主人公なのだ」と次第にわかってくる(宮田, 2020)。女の子は、近所の女性と愛想よく挨拶を交わして団地の一室に到着する。家では、狭いリビングでワープロに向かう母親。母親との会話で主人公が「しずく」(雫)と判明する。

母親には、ややつつけんどんな口調の雫。しかし、そこに刺々しきや相互不信は感じられず、親と距離を置き始めた中学生の反応として不自然さはない。この様子からは、外では愛想よく振舞える社交性を備えつつ、親子関係では互いに気を遣わず、いわば「地」を出せることが示唆されている。おつかいの理由も、どうやら別段切迫した事情があったわけでも、小遣い稼ぎのためでもなさそうで、母親が書き物で忙しいため頼まれて行ってあげたことが分かってくる。つまり、確かに母親への口調はぶっきらぼうにも映るが、母親を慮っておつかいに応じてあげるような心根の優しい女の子であることが、実にさりげなく描き出されているのである。

このように、徐々に主人公の生きる世界や家族の関係性が明らかになってくる。宮田(2020)も、この冒頭シーンについて「二分足らずの時間の中で物語の舞台と主人公を明らかに」していると指摘するように、監督の近藤はそうとは感じられないほどさりげない仕掛けを施して、物語の舞台や母子関係、さらには主人公の性格まで詳らかにしていくのである。

こうした冒頭シーンは、物語の主題を象徴的に表すことが多いが、『耳をすませば』では何が主題として打ち出されているのだろうか。

2) 「故郷に帰る」という主題

冒頭の曲“Take Me Home, Country Roads”には、物語を底流する主題が明瞭に示されている。この曲は、タイトルそのまま、募る望郷の思いを表現するものである。“Almost Heaven, West Virginia”と、ウェストバージニアを「ほぼ天国」と称し、故郷の山を母親に喩えるなど、故郷へと回帰したい思いや憧れがストレートに歌いあげられている。都会で疲れた人々を優しく慰撫するような歌声も相まって、故郷(ウェストバージニア)への思いが喚起される。そんな歌が、大都会東京の風景と重ね合わされているわけである。ここで、「東京=故郷」という図式が強く印象づけられる。

少し回り道にも思えるが、ここで物語の時代背景を押さえておきたい。

その作業により、この映画で描かれる「故郷」の意味が理解しやすくなるだろう。先述したように、柊あおいの原作が発表されたのは1989年、映画の公開はその6年後、1995年である。映画に描き出された風物(車種や駅の改札の様子、バーコードの導入具合)などを詳細に検分すると、おそらく時代設定は1988年頃であると推測される(蛇足だが、まさに雫は筆者と同世代である)。

雫の父は45歳、母は43歳という設定であり、1940年代生まれ、団塊世代に該当する。この世代は「金の卵」として囃され、集団就職で田舎から都市部に流入した世代である。雫の両親が、実際に田舎から上京したかはもちろん確かめようはないが、この世代にとっては、故郷と聞けば脊髄反射のように郷里の田園風景が思い浮かぶことが多いのではないかと推察される。

しかし、映画の冒頭で“Take Me Home, Country Roads”が重ねられる景色は、田園風景ではない。大都市東京であり、家路を急ぐ人々が行き交う下町の雑踏であり、コンクリートの団地である。雫たち(私たち)団塊ジュニア世代は、その多くが都市で生まれ、都市で育ってきた。この世代にとっては、盆と正月にしか行かない田舎の風景より、都市の風景こそが故郷であり、そこにリアルな懐かしさが喚起されるのではないかと推察される。

評論家の川本三郎(2015)は、雫の住む多摩丘陵を開発したコンクリートの町を、「新しい〈故郷像〉」と呼び、作家の井上ひさし(2015)も、雫にとって「かけがえのない、ただ一つのふるさと」であるとしている。また宮田(2020)も、この街を「単なるベッドタウン以上の(潜在的／顕在的)ふるさとである」としている。実際、制作にあたってスタジオジブリ(2015)は「宮崎(制作プロデューサー)と近藤(監督)が掲げた目的の一つに『都会生まれの人間にとっての“ふるさと”を描く』というものがあつた」と述懐している。

そこで冒頭シーンを子細に見ると、東京の夜景の明かりは冷たく無機質なものではなく、温かみを感じる電球色である。また街の様子は雑然としつつも、そこに活気や和やかさからなる温もりが感じられる。そうした情

景に“Take Me Home, Country Roads”が重ね合わされ、さらに雫がお使いから「帰る」シーンが挿入される。これらが相まって、この東京のコンクリートの街こそが雫たちにとって帰るべき故郷であることを脳裏に刻みつけるのである。

このように冒頭シーンでは、東京が雫たち世代にとっての「故郷」であることが示され、そして「故郷に帰る」という主題が打ち出されるのである。

3) 主人公の「普通」さ

次に、主人公の雫にスポットライトを当てよう。彼女の住まいは東京のベッドタウンにある団地である。家族は4人。父親は図書館に勤務する地方公務員、母親は専業主婦と、1990年代における「普通」の定型をなぞったような暮らしである。雫自身も無類の読書好きというくらいで、運動や勉強に秀でているわけではない。また人目を引くような美人というわけでも、その他に特別な才能があるわけでもない。その意味で、日本中どこにもいる無数の「普通」の女の子の象徴として象られている。(ここでの「普通」は、多様な暮らしや家族のありかたを否定する意図はなく、当時の日本社会のマス層に属していたという意味である。念のため。)

この「普通」について、他ならぬ監督の近藤喜文(2015)も、「例えば、宮崎(隼雄)さんが(監督を)やっていたら、ある特殊な才能を持った子供が自分の才能について悩むみたいな内容になった気がするけれど、僕がやった結果、キャラクターの動きに勢いが無い分、普通の子どもが悩んで『物語』を書こうとしている感じに受け取れる」(括弧内は筆者が補足)と述懐している。

こうしたあくまで「普通」の設定、「普通」の女の子であることは、私を含めた特別な才能を持たない多くの「普通」の人々にとって、物語への共感や没入を容易にすることだろう。

4. 「高み」への上昇

続いて、主人公の「月島雫」、彼女が憧れる「天沢聖司」の名前に籠められた意味を読み解きたい。天沢聖司の「天」、月島雫の「月」には、神聖さや、高さ・上方・上昇といったメッセージが読み取れる。物語の重要な舞台である、西老人の地球屋も小高い丘の頂上、雫が通い詰める図書館も丘の上、聖司が音楽修業に行くのを告げるのも校舎の屋上、また2人が最後に朝日に包まれ結婚の約束をしたのも丘の上である。雫を地球屋に導いた猫は「ムーン」(月)であり、雫の初めて書いた物語でも、主人公の猫であるバロン男爵は空高く飛翔する。このように「これでもか」と言わんばかりに高さ、そして高さへの志向性が頻出する。宮田(2020)も、雫と聖司に「飛翔の勢い」を読み取り、「雫が常に空を志向」していることを指摘する。筆者は、この高さ、そして高さへの志向性は、思春期の2つの大きな特徴と関わると考えている。

1) 視点の上昇

思春期に入ると、垂直上方の高みから自分や世界を俯瞰するような視点を手にしていく。それまでは、世界で生きる意味や自他を客観視することは少なく、視点はいわば埋没している。しかし、思春期では俯瞰的に事態を認識したり、自他を客観視したり、時に世界の事象について論じたりすることも出てくる。

また親子関係においても、親との関係性にどっぷり浸っていたところから、親を1人の人間として対象化して見るようになる。例えば、「私のお母さんは世界一」と母親を絶対視するのではなく、「私の母は、～という面もあるが、～という面もある」といった具合に他の母親と比べて上で相対視するようになる。また自分に関しても、急に容姿を気にするなど他者にどう思われているかを気にしたり、自分の言動をメタ的に振り返る動き

が生じる。また認識力が上がって周囲の大人を客観的に見るようになると、大人の考えを鵜呑みにもできず、違和を唱えることも増える。

もちろん、まだまだ事態を冷静に認識できない面も残るが、垂直上方の高みから見るように、客観的に自他を認識する力が急激に育っていくのである。

2) 理想の高さ

また、古来より高山や天の国は聖性や理想といったイメージが付与され、高さは聖性や理想と結びついてきた。思春期は高い理想や夢を追い求め、そこに向かって羽ばたく時期である。雫はもちろん聖司も、両親の反対を押し切って海外留学を決めるなど、一心にバイオリン職人の夢へ向かっていく。そうした生き方は、金や社会的地位といった俗世の些事に汲々とする私たち大人がすっかり失った眩しい光を放つ。

しかし、そこには地に足が付かない危うさもある。そもそも理想の高みにひたすらに向かう生き方は、不安定さと隣り合わせである。目標が高ければ高いほど、いくら頑張っても達成できない現実に直面する機会が増える。児童期までの夢、例えば「ノーベル賞を取る」といった理想の達成はおろか、クラスで1番、いや中位の成績を保つことさえ汲々としてしまう。また「ワールドカップに出る」はずのサッカーも、部活で試合に出ることさえ難しいことが分かってくる。多くの場合、そんな身も蓋もない現実を思い知らされるのだ。それによって、自己評価は一気に落ち込むことになる。

それに加え、思春期は、大人に比べて現実に裏打ちされた「実績」が少なく、1度の成功や失敗で自己への評価も激しく揺れ動きやすい。いわば、微分的な不安定さがあるのだ。一方、大人は多少の失敗があっても、これまでの現実で積み上げた「実績」があるため、自己評価は大きくは揺らがない。いわば積分的な安定感があるわけである。(逆に言うと、自己評価の低さは多少の成功では上がりもしないということでもあるが)。

彼らの自己評価は、「上昇一下降」を絶えず激しく揺れ動く。雫も、物語を書く中で、筆が進む時期は気持ちが高揚し、逆にスランプに陥ったときは、「この世の終わり」のようにひどく落ち込む様が見て取れる。われわれが心理臨床で出会う思春期の子どもたちも、少しの出来事で激しく一喜一憂する。例えば、野球では1試合活躍するだけでメジャーリーグへの希望を熱く語り、1つのエラーで「野球を辞めようか」とまで思い詰めてしまう。また、昨日まで「自分は無価値で死にたい」と言っていたのに、仲のいい友達ができた途端、まるで何もなかったかのようにケロリとしている。こうした体験は、思春期の面接場面ではおなじみの光景である。

このように思春期になると、天上の宝石に憧れるように高い理想に向かうものの、その理想が高ければ高いほど、理想には到底及ばない現実直面して自信を失うことが増える。それでいて自分の価値観や経験に裏打ちされた自信もないため、自己評価は不安定になりやすい。しかし、年代的に大人に素直に甘えたり頼ることも難しくなっている。このような苦悩を抱えやすい思春期の子どもたちに、一体どのように関わればいいのか。

雫も物語を書く夢を抱きつつも、才能に自信を持たず、なかなか前に進めなかった。また、書き始めても才能の限界に直面して落ち込んでしまう。そんな雫に対する周囲の関わりの中に、思春期の子どもたちへの支援のヒントが隠されていると考える。そこで、彼らの関わりについて心理臨床学的に読み解いていきたい。

5. 周囲の関わり

1) 父親の関わり

① 他のジブリ作品との比較から

まず、雫の父親について触れたい。これまでのジブリ作品の中で父親の関わりが印象的だったものとして『魔女の宅急便』や『となりのトトロ』

が挙げられる。この2つと比較すると、雫の父親の関わりの特徴が明らかになるだろう。

『魔女の宅急便』の始まりにおいて、キキはやや幼さが目立つ少女であった。1人っ子で愛される(与えられる)のが当然という態度がそこかしこで見られ、気まぐれで周囲を振り回し、しかも配慮に欠ける面があった。そんなキキに、父親は希望(半ばわがまま)を叶える優しい父親として登場する。またキキが旅立つ前、キキは「高い高い」をねだり、希望を叶えて抱きしめるなど父子の距離感は近い。こう見ると、キキの心性としては思春期の入り口、あるいは児童期的なものだったと考えられる。しかし、旅立った後は密な関わりは一切なくなる。つまり、キキの成長にとっては、それまでの密な関わりが前提であり、物語ではそれを基盤にした上での分離の体験が重要だったと考える。つまり旅立ってから、父親はお払い箱だったわけである。

また『となりのトトロ』では、サツキとメイはひたすらしっかりもので、母親のいない不安や淋しさを口にせず、我慢を重ね、やや過剰適応的に頑張るところがあった。そんな姉妹に対して、父親は母親の代わりとして受容的に接しており、やはり優しい父親として登場している。キキの父親よりも一層スキンシップ的な関わりが多く、一緒にお風呂に入ったり、川の字になって寝たり、自転車に3人乗りしたり、肩車をしたりと、その距離は密である。さらに、キキの父親と違って分離の機会はなく、物語の最後まで関係性は密なままである。ここでは何より母親不在の不安や悲しみを埋めることが求められており、父親は受容的な関わりや、2人が子どもに戻れるような楽しい関わりを心掛けていたのではないかと推測される。

一方、雫はどうだろうか。物語を通して雫は両親とは距離がありつつも安定した関係性があることが見て取れる。学校生活も順調で、友人達との親密な関係性に開かれ、友人への配慮もなされていた。ここからは、雫は親子の密接なスキンシップが必要とされるような時期は、既に卒業していることが分かる。心の発達段階が思春期に入ると、親は直接的に手を出し

たり、世話をする必要はなくなる。子どもの世界に土足で入るようなことはせず、適度な距離を保ち、心を砕きつつ見守る関わりが求められる。

雫の場合、父親とは常に一定の距離感があった。また成績が落ちたときの家族会議では、雫はやや畏まって緊張した風であった。とって、毛嫌いしたり敬遠しているわけではなく、父親が勤務する図書館に通いつめたり、弁当を届けたりと、親しみを感じている様子は伝わってくる。そもそも本や物語世界への憧れも、図書館で働く父親の影響があるのではないか。ここからは、直接的なスキンシップなどはなく物理的には分離している一方、心理的にはつながりはあったように思われる。これは、思春期の父娘関係としては、極めて自然なものだと思われる。

② 家族会議での父親の関わり

そんな父親の関わりの中で、最も印象的なのは、雫が物語に没頭して成績が落ちたときの家族会議での対応である。

ここで父親は、雫を前にして親として2つの思いの狭間で葛藤があったと考える。むろん推測に過ぎないが、父親自身も「人と違う道」を生き「しんどさ」を体験してきたのではないか。現在でこそ図書館の司書は、公務員として安定した職業とみなされているが、30年前は決して高給を見込める仕事ではなかった。実際に、広い一軒家に住む友人の夕子と違って、自分の個室もない団地住まいである。それゆえ、親として「人と違う道」を生きることで子どもに苦勞をさせたくないという親心があっただろう。一方で、子どもの主体性を尊重し、子どもの判断を信じてあげたいという思いもあったのではないか。父として、子どもに自由な生き方を認めてあげたいという親心である。

この話し合いまで、雫が家族の中で自分の意見を主張することは(少なくとも映画の中では)1度もなかったが、物語を書くことに関しては雫は頑として意見を曲げようとしな。父親はその様子に触れ、また一心に書き物に打ち込んでいる様子を図書館で間近に見てきたからこそ、次のように

口を開くのだ。

「隼のしたいようにさせようか、母さん。一つしか生き方がないわけじゃないし。」

「よし隼。自分の信じており、やっぺら。」

ここで母親を説得し、隼の選択を後押しする。隼ははじめて面と向かって思いを自分の主張をし、それを父親に受け入れられる。それは、真に主体的な歩みを許容されることである。また自分で選んだ生き方だからこそ、行動の責任感も芽生えるのではないか。

「でもな、人と違う生き方は、それなりにしんどいぞ。」

「何が起きてても、誰のせいにもできないからね。」

ここでは父として「人と違う生き方」の「しんどさ」を娘に示す。父親として無責任に何でも許すのではなく、社会の厳しさを伝え、娘の覚悟を要請するのである。

「それから、ご飯の時は、ちゃんと顔を出しなさい。」

「そうだ、家族なんだからね。」

最後に、食事の際には顔を見せることを約束する。これにより、糸の切れた凧よろしく現実離れする事態を防ぎ、現実につなぎとめる働きをするだろう。また娘の体調や状況を適宜確認することで、体調や精神状態を確認できるだろう。

このように、父親は隼の頑張りを深く理解し、葛藤しながらも、親としての責任の下で、娘の主体的な生き方の後押しをおこなった。直接的に援助する、手取り足取り世話をするといった物理的なエネルギーを使うのではないものの、極めて大きな心的なエネルギーを用いたと言える。

2) 母親と姉の関わり

次に母親は、そこかしこに現実的な面が見られる。一方で、夢に向かって(当時には珍しく)大学院に進むなど、自ら人生を切り開く女性として描かれている。大塚(2015)が、この母親について「シンプルなロールモデルになっている」と指摘するように、雫が物語を書くという試みをするうえで大きな影響を与えたと考えられる。ただやはり、ベタベタとした関わりはなく、基本的には雫の主体的な生き方を許し、問題が生じたときに適宜助言や注意をする程度である。これは、雫の発達段階に応じた自然な関わりだと思われる。

また姉は、アルバイトで1人暮らしの費用を賄うなどしっかりものであり、地に足の付いた現実的な女性として配役されている。マイペースで夢見がちな雫とは対照的に描かれ、妹に現実を教え、注意し、時に手厳しく叱責する存在である。こうした世事を教え、細やかに注意を与えてくれる存在は、時に浮世離れしてしまいがちな思春期の子どもにとって不可欠だと考える。

ただ雫の場合は、姉の受験勉強をすべきという指示や叱責を結局はねつけた。そのため、この姉の関わりは単に口うるさいだけで意味がなかったようにも見える。しかし、姉の言葉がなければ、内なる衝動に突き動かされ、単に書きたいから書くだけに過ぎなかつただろう。しかし、姉の言葉により「物語を書くか受験勉強をするか」という2つの方針を自分の中で突き合わせて葛藤することを余儀なくされたと考える。物語を書くという行為自体は変わらないが、「リスクを十分に理解し、それでもやはり物語を書く」という、より自覚的・主体的な選択をすることになり、何よりその覚悟も定まったことだろう。

もちろん母も姉も決して冷淡なわけではなく、家族だからこそ雫を思う気持ちが底にある。雫が自覚しないまま「高校に行かない」といったハイリスクな生き方をして、うかうかと苦勞を背負いこむのを防ぐ思いが底にある。また、心配しながらも最終的には雫の生き方を尊重するのである。

ここまで家族の関わりを検討してみると、重要なのは、単に零の生き方を「認める—認めない」という選択自体ではなかったように思えるのだ。一見、子どもの自由な生き方を許す方が評価されがちだが、それは単に無責任だったり、子どもとの衝突を避けるだけの場合もよくある。例えば、私たちは「よその子」であれば、どんな無茶な選択であっても認められる。なぜなら責任がなく、また実はそれほど気にも掛けていないからだ。また子どもに良い顔をしたくて、野放図なわがママを容認することも少なくない。

零の父と母姉は「認める—認めない」という現象面では真逆の関わりをしたが、いずれも親としての責任感と零を真剣に思いやる思いが基底にあった。零が現実とのつながりを失わないよう、零の反発を恐れずに注意を与えつつ、危なっかしい零の歩みをハラハラと気を揉みながら見守っていたと考えられる。

こうした関わりは、零の胸に届いたと思われる。先にも触れたが、単に書きたい思いに衝き動かされて書くだけではなく、テストや受験といった現実を直視しつつ、それでもやはり自分の責任において物語を書く、という主体的な決断につながったのではないか。辛いことがあっても途中で投げ出さなかったのも、本気で取り組む覚悟が生まれたからではないだろうか。

3) 友人の関わり

思春期になると、家族との関係から、親密な同性とのチャムシップと呼ばれる友人関係に開かれていく。アメリカの精神科医の Sullivan.H.S. (1953)によれば、チャムシップとは、前思春期から思春期頃に現れる同性同年齢の1対1の親友関係を指す。相手のことが自分と同等、もしくはそれ以上に大切に思える愛他的な関係であり、異性愛につながる親密性の出現の始まりとされる。異性との関係に一足飛びに進むのではなく、その前段階として同性同年齢の友人関係の中で、互いを尊重し他者を思いやる気

持ちを育むことは発達において重要である。

須藤(2010)は「児童期から青年期への移行期にあたる前青年期は、子どもから大人への実存的な次元での変化を内包した時期であり、発達的な転換期である」とし、チャムシップは、この時期を乗り越える上で情緒的守りの機能を果たすことを示した。また須藤(2011)は、「自分を作っていく上で不安な心を支える準拠棒として重要な役割を果たす」とも指摘している。このように反抗期を迎えた思春期の子どもにとって、親には話せない不安や悩みを同性の親友に相談できることは重要な意味がある。

ここでも『魔女の宅急便』や『となりのトトロ』と比較してみよう。『魔女の宅急便』のキキは、故郷での友人関係は特定の誰かというより、不特定多数と等分に付き合うような関わりだったことが見て取れる。また、魔女の修業のためにやってきたコリコの町では、トンボという少年以外とは友人関係を持たないし、持つことを避けてさえいる。まだ、仲良くなったおばあさんや、母親代わりのオソノさん、姉的なウルスラといった年上の疑似家族との関わりが重要であったと考える。また『となりのトトロ』では、サツキもメイは友人関係より、父やカンタのおばあちゃんとの関係が圧倒的に重要だった。いずれも、対等な友人関係よりも、まだ大人との間で庇護されることが必要だったわけである。

一方で雫は、家族と話すシーンはそれほど描かれておらず、親友の夕子や合唱部の友達と談笑するシーンが目立った。特に、雫は夕子を大切に思っており、互いに恋の悩みなど何でも相談し合える親友であった。雫も夕子との関係の中で自分を振り返り、不安な心を支えてもらい、物語を書く決意が定まる。このように、キキやサツキ・メイと比べてみると、圧倒的に同性同年齢の友人関係が大きな役割を果たしていたと思われる。

4) 西司朗の関わり

続いて、聖司の祖父である司朗の関わりを見たい。司朗の関わりは、心理臨床学的な視点から検討すると、その奥深さが見えてくるように思われ

る。まず、物語の執筆前の関わりを見たい。

① 物語制作前の言葉

雫は、夢に向かってひたむきに努力する聖司に感化され、自分も物語を書こうと決める。ここでは、司朗にバロンを主人公にした物語を書く許しをもらいに行った時のやりとりを紹介する。

雫は「ちゃんと書けるかどうか、まだ分からないから」と不安をもちますが、司朗は一笑してこんな言葉をかける。

「ハッハッハッハ。それは、私たち職人も同じです。はじめから完璧なんか期待してはいけない」

この言葉で、不安は自分だけではなく、誰にもあることを知って安心できたことだろう。また、完璧な物語を目指して不安になっていたのが、それを目指すこと自体を禁止され、完璧でなくても受け入れてもらえることが言外から分かり、執筆の不安が随分と減ったのではないか。

続いて司朗は、雲母片岩というエメラルドの原石が含まれた石を雫に見せ、その原石を才能に喩えながら、含蓄に富む言葉を連ねていく。

「雫さんも聖司もその石みたいなものだ。まだ磨いていない自然なままの石。私はそのままでもとても好きだがね」

ここで、雫のありのままでも魅力があることを伝える。つまり、存在自体をまず肯定しているわけである。

「しかし、バイオリンを作ったり、物語を書くというのは違うんだ」

「自分の中に原石を見つけて、時間をかけて磨くことなんだよ、手間のかかる仕事だ」

ここで司朗は、創造的な生き方をするためには、天与の才能を磨く(努力する)必要があることを伝えている。また、その作業には途方もない時

間と努力が必要なことも。

ただ、誰も教訓めいた説教を押し付けられ、生き方まで強いられるならば反発が生じるだろう。逆に、助言を鵜呑みにして受動的に添うなら、依存に陥ってしまう。司朗は、そうした上から目線の強制性を一切感じさせない。押し付けがましくならないように石にことよせて、しかも一人語りのような口調で、そっと言葉を置いていくのだ。

ここで、雫と聖司の名前を今一度よく見てみよう。天沢聖司、月島雫という名には、「天」「月」という高さや上昇へのイメージだけではなく、「沢」と「雫」という、滴り落ちる・流れ落ちるという下方や下降のイメージも籠められている。先に、思春期には、高い理想や夢に向かう動きがあることを論じた。一方で、それを地上に流れ落とし、少しずつ現実で実現していく動きも必要である、そんなジブリ側のメッセージが読み取れるのである。思春期は、高い理想を掲げつつも、しかし夢を追って上ばかりを見て足元をふらつかせるのではなく、理想に近付くため足場を固めるように努力することが求められると考える。司朗が「手間のかかる仕事だ」と述べるのも、この才能を地道に磨き続ける営みの必要性を暗に示していると考ええる。

「その石の一番大きな原石があるでしょう」

「実は、それは磨くとかえってつまらないものになってしまう石なんだ」

一方で司朗は、努力が万能ではなく、いくら努力しても無駄に終わることがある、そんな現実も伝えるのだ。そして、いくら豊かな素質に見えても、期待外れに終わることがあることも。そして言外に、才能の有無はやはり努力しないと分からない、というメッセージも伝えているのである。

このように、司朗は雫を子ども扱いして、「努力すれば何でも叶う」などと気安めを言うのでも、口当たりの良い言葉で現実を覆い隠すこともしない。現実には、いくら努力しても無駄に終わることはある。努力は成功のための必要条件ではあるが、十分条件ではないからだ。それは、いわば

身も蓋もない現実である。しかし、だからといって剥き出しの言葉で冷峻な現実を突きつけるのでもない。ここでも、あくまで石に託して、そっと差し出すように語りかけるのだ。

「もっと奥の小さいものの方が純度が高い。いや、外から見えないところにもっといい原石があるかもしれないんだ」

しかし、いくら努力しても上手くいかなかった場合に備えて、救いとなる言葉もさりげなく埋め込んでいく。仮に努力が報われなかったとしても、それで希望の扉が完全に閉ざされるのではないこと、今は見えないが、違った才能が眠っている可能性があることを伝えるのだ。

このように、司朗は上から目線で教訓を押し付けたり指導したりはしない。雫の苦悩が根本的に大切なもので、だからこそ簡単な答えがないことを深く知るからこそ、安直でマニュアル的な解決策も教えたりもしない。また「努力さえすれば成功する」などと根拠のない安請け合いをするのでもない。あくまで原石の話としての体裁を保ち、噛めば噛むほど滋味が沁みだす料理のような、味わいのある言葉を贈るのだ。あくまでそっと。

こうした言葉に深く支えられたからこそ、雫は不安と闘いながら物語を書き始め、そして書き終えられたと考える。次に、物語を書き終えた雫への関わりを取り上げてみよう。

② 物語制作後の言葉

雫は寒いベランダで凍えながら、不安と緊張の中で司朗が物語を読み終えるのを待ち続けていた。司朗は、そんな雫に驚きながら、まずこう語りかける。

「こんな所で… 雫さん、読みましたよ。ありがとう。とてもよかった。」

この言葉に偽りや空疎な励ましの意図は感じられない。あくまで、素敵

『耳をすませば』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

な作品を読ませてもらった感謝の思いと偽りのない評価が表わされている。ただ、自分の作品の問題や不十分さを痛感している雫は、司朗の言葉を額面通りには受け取ることができない。

「ウソ！ ウソ！ 本当のことを言って下さい！」

「書きたいことが、まとまってません。後半なんかメチャクチャ。」

「自分で分かってるんです！」

これは、単に雫の絶望が表わされているだけとも思える。しかし、心理臨床学的な視点で見るとここに雫の変化を感じ取ることができる。

ここで表わされているのは、これまで抱えてきた「自分には才能があるのかなのか」といった漠然とした不安ではない。実際に取り組んだからこそわかった自分の現実的な問題点であり、またそれを直視した傷つきである。それは確実に成長と言えるが、自分に刃を向けるような気付きであり、リアルな絶望と身を切るような痛みが伴ったと考える。それに対し、司朗は何を言うのか。

「そう、荒々しくて率直で、未完成で。聖司のバイオリンのようだ。」

ここには、やはり年少者を励ますような、気休めやおべんちゃらはない。ありのままの評価を、感じた通りに伝えている。それは、学業成績のように数直線上の一点で規定されるような評価(100点満点で78点／クラスで12番目といった評価)ではない。例えば、「荒々しさ」は、荒っぽさや枠破りと見れば欠点でもあるが、枠に収まらない大いなるエネルギーが溢れていると捉えれば美点であるように、いまだ定まらない「原石」の価値をそのまま正確に評価していると言える。初めて削り出した長所と短所が同居するような「原石」の価値は、一軸上の1点で規定するような評価は馴染まない。多軸的かつ記述的な評価こそが相応しい。

しかも最後に、最も雫に響いたであろう言葉を埋め込む、そんな心憎いばかりの配慮を見せる。それは何か。雫の悩みを思い起こすと自明であろう。

雫は、どんどん先に行ってしまう聖司に追いつけない焦りや、聖司に釣り合っていない引け目を感じていた。それは、後のシーンで「聖司君がどんどん先に行っちゃうから、無理にでも書こうって…私怖くて、恐くて」と述べているところからも自明であろう。司朗は雫の悩みの本質を的確に捉え、そしてこんな言葉かけをしたのだ。「聖司のバイオリンのようだ」。

司朗と聖司は、実は多くの共通項がある。「司」の字が同じで、おそらく司朗の「司」の字をもらって聖司と名付けられたのだろう。職人の修行のため留学すること、音楽に造詣が深いことなど、司朗の影響と考えることが自然である。単なる祖父と孫という関係を超えて、深く生き方が響き合い、誰よりも聖司を深く知り、通じ合っていたのではないか。そんな司朗からの言葉は、100万の労いの言葉より、深く心に沁み、雫を支えたと思われる。

「雫さんの切り出したばかりの原石を、しっかり見せてもらいました。」

「よくがんばりましたね。あなたは素敵です。」

司朗は、原石を磨く「手間のかかる仕事」に真摯に取り組んだ雫に対し、「しんどい」道を歩む同士に語りかけるように、ここでも嘘偽りのない率直な賞賛を口にしていく。

私たち個人心理療法をおこなうセラピスト(心理療法家。以下Th)の多くはクライアント(来談者。以下Cl)の行動を直接褒めることは殆どない。褒めることは、実は特定の生き方を強いることにつながりかねないためだ。例を挙げてみよう。

他者の気持ちを察してばかりで、そんな生き方に疲れ果てて不登校になった優等生がいたとしよう。ある時、彼が辛いけれども久しぶりに登校したとする。それを「よく頑張ったね」「すごいね」などとThが褒めたらどうだろう。もちろんClは褒めてもらって嬉しいだろう。そして、またThに褒められたいがために登校することが増えるかもしれない。「それは素晴らしい変化だ」、一見そう思えるかもしれない。しかし、彼は真に

主体的に登校している、と言えるだろうか。Th の価値観に添う生き方を強いただけではないか。それなら、他者の意に添う彼の生き方を強化しただけになる。そして、残念ながらこうした登校は多くの場合で長続きしないことを、我々は知っている。

しかも CI に思い知らせたことになるのだ。Th が、自分が学校に行ったら喜ぶことを。裏を返せば、登校しない自分は「頑張っていない」「すごくない」存在として実は受け入れられていないことを。そうなると「学校が辛い」「行きたくない」といったありのままの語りはできなくなり、行動も自由にできなくなってしまう。つまり、主体的な語りも行動もできなくなってしまうのである。その時、彼はいったいどうすれば良いと言うのか。

一方で、ここでの司朗の心からの賛辞は、雫を深く支えるものになったと考える。「褒めることには問題がある、そう言った舌の根も乾かないうちに何を言っているんだ」。そんなお叱りを受けるかもしれない。ごもつとも。もう少し説明が必要となるだろう。

心理療法では、Th はあくまで白紙のスクリーンの如く価値観を伝えず、中立的に接し、自由な語りを展開させることで CI の自発的な変化を促していく。そこでは特定の行動を恣意的に褒めたり、指導したりすることはなく、CI の自発的な語りを徹底して受けとめていく。それは、そうした語りを生み出す存在そのものを尊重することと言えるだろう。つまり、直接的に褒めることはないが、行動より、それを生み出す存在自体に深い敬意を払うわけである。

ここで、司朗の「あなたは素敵です」という賞賛について検討してみよう。ここで褒めているのは、物語の出来映えではない。また、心理療法を訪れる CI は、主体性を奪われるか、もしくは十分に主体性が育まれておらず、それで問題を呈している場合が多いが、雫は強い主体性がある。また司朗には、雫を自分の価値観に添わせる考えや特定の生き方を強いる意図もない。より素朴な心からの思いの発露である。しかも、ここで賞賛と

敬意が向けられるのは、不安と戦い、よく頑張った雫の存在自体に対してである。こう考えるなら、「ほめる—ほめない」という現象面では心理療法とは真逆であるが、相手の存在自体を尊重するという姿勢では深く重なり合う。

何より、この言葉には創造的な苦闘への最大級の尊敬がこめられている。自らも苦しみながら創造的な道を歩む、そんな「同士」からの言葉に、雫はどれだけ支えられたらうか。そして、最後に次のような言葉を言い添える。

「慌てることはない。時間をかけてしっかり磨いて下さい。」

この言葉で、才能を磨くには、じっくりと時間をかける必要があることを伝える。また、雫の才能が原石としてしっかり存在し、しかもそれが磨き甲斐があることも言外に含ませているのである。

雫は、ここまで聖司に一気に追いつこうと一心不乱に物語に打ち込んできた。この言葉に心から安堵し、ここで「武装解除」が許された思いがしたのではないか。それを裏付けるように、これを契機に雫は受験勉強に戻ることができたのである。

司朗の関わりをまとめよう。彼の言葉には、心の籠らない気休めや安易な賞賛は1つもなかった。また子どもだましの言葉もなく、創造の道を歩く対等な同志に対するように、含蓄に富む知恵の言葉をそっと差し出していた。それは、直接的に生き方を指示するようなものではない。自らの意志で、何度も咀嚼することでその奥深い味に気付くような、そして絶望の淵に陥ったとき支えとなる、そんな言葉であった。頑張ったプロセスを認め、ねぎらい、存在自体を肯定したのである。

5. 多層的な関わりの意味

ここまでの周囲の関わりを振り返るなら、いずれの関わりも雫にとって欠くことができなかつたと考えられる。父、母、姉、友人、司朗、その中の誰か1人だけが特筆すべき関わりを果たしたというより、それぞれがそれぞれの役目を果たしたことで、雫は大きく成長を遂げられたのではないか。「どの関わりが良かった」ということはなく、こうした多層的な関わりが網目のように機能して雫を支えたと考える。

仮に皆が母親や姉のような関わりだけなら、理想に向かって執筆することはなかつただろうし、雫の劇的な成長もなかつただろう。一方で司朗のような関わりばかりなら、現実を直視せず、理想を追うのは良いが、覚悟は定まっておらず、しかも足元も危ういままだったかもしれない。ここでは、それぞれが自分の個性を生かしつつ、雫のことを思いやって関わっており、それが雫の成長を支えたと考える。

ここから敷衍するなら、思春期の子どもたちに関わる場合も、支援者それぞれが子どもの発達状況を見定め、割り振られた配役をしっかりとこなす、そうした関わりが重要なのではないか。さらに言えば、思春期の子どもたちは一人一人違い、言うまでもなく多様である。彼らと接する際に、画一的な関わり方のモデルというものは実は存在しない、そんな風にも思われるのである。理想的な関わり(の幻影)に自らの関わりを無理に当てはめるのではなく、彼らの内面を理解した上で、支援者の個性や持ち味を生かして関わるのが、子どもの成長を支える安全ネットとして働くのではないだろうか。

それでは次に、雫自身の変化の要因について考えてみたい。

6. 雫自体の変化の要因

1) 最善を尽くしたこと

雫が成長した彼女自身の要因としては、現時点での最善を尽くし、自分のできることと同時に限界を知れたことがあったのではないかな。何か夢があって、それに手を付けなければ「やればできる」という万能感にいつまでも酔ってられる。一方で、現実で達成した体験もないため、当然ながら「できないのではないかな」という不安は払拭できない。

例えば、音楽活動をしていて「いつか本気を出せば、すごい曲を作れる」と言いつつも、いつまでも曲を作ろうとしないCIがいたりする。作らないのは、本気で作って失敗して「才能がないという現実」を直面するのが怖いからだ。ただ、先述したように実際にやることで、傷つくこともあるが、自らの「できること／できないこと」の境目が明瞭になる。いわば自分の「現在地」が分かるわけである。それによって、次なる「目的地」が分かり、そこに至るための対策も立てられよう。

雫の場合も、「後半がめちゃくちゃ」という現実には、確かに現時点での限界ではあるが、それは単に限界を突きつけられた体験ではない。自分の問題を明確に認識し、また今後何が必要なのかを認識できたのである。それは、次の言葉で明らかになる。

「私、書いてみて分かったんです」

「書きたいだけじゃダメなんだってこと。もっと勉強しなきゃダメだって」

「私、背伸びしてよかった。自分のこと前よりも少しわかった」

ここでは、自分の限界まで挑戦したからこそ、今の自分に至らないことが明らかになったことを伝えている。ここでの雫には、万能の幻想に酔いながらも、一方で輪郭のはっきりしない不安に怯える様子は微塵も感じない。また無能感に打ちひしがれて、不必要なほどに悲観する様子はやはり

『耳をすませば』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

ない。この万能感と無能感とは正反対であるように思えるが、自らの現状を正確に認識せず、成長に必要な努力を放棄するという意味で、一枚のコインの裏表である。

ここでの雫は、万能感にも無能感にも陥らず、現実裏打ちされた手応えのある有能感を得ていたからこそ、悲観に陥らず、今足りないことを直視できたのではないか。それにより、雫は今必要な勉強に取り組むことを決めたと考える。

2) 物語を書いたこと

雫にとっては、物語の制作自体にも意味があったと思われる。

作家の村上春樹は、河合隼雄との対談の中で、小説を書くことは「多くの部分で自己治療的な行為であると僕は思います」と述べ、自分は「欠落部分を抱えている」と吐露した上で、物語を書くことが「その欠落を埋めるための一つの仕事になっている」としている。また河合(2003)は、「自分という存在の意義を確実にするもの」として物語があることを指摘する。雫にとっても、創作することは苦労もあったが、しかし自己治癒的な意味があったのではないか。

それでは、雫の物語はどのようなものだろう。映画『猫の恩返し』は雫が制作した物語とされている。そこで、『猫の恩返し』の概要を簡単に紹介する。

主人公は女子高生の吉岡ハル。親しみやすい性格だが、学校に遅刻したり、人に流されやすいところがあった。また、片思いの相手に告白はできないままだった。ある日トラックに轢かれかけた猫の国の王子を助け、猫の国へ招待される。そこで王子の后にされそうになるが、白猫の手引きによって城から脱出する。塔の頂上に行けば人間界に戻れると知り、敵を倒しながら塔を登っていく。最後はバロンの助けを借りて無事に人間界へと戻る。最後に学校の屋上でバロンに告白までするが、「また、困った事件があっ

たら猫の事務所の扉は開かれる」と言い残して、バロンは立ち去る。冒険を終え、ハルは片思いを断ち切るなど成長した姿が描かれる。

この物語では、少女から大人の女性への成長物語が描かれている。人に流されやすく、自分の意志を言えなかった女の子が、異性の守り手の力を借りながら、自らの意志を打ち出し、敵と戦いながら、ここでも高みへと上昇していく。最後にはバロンに自らの恋心をしっかりと伝えるのである。劇中劇は、主人公のありかたを象徴的に示し、作者の内奥の思いとも響き合うことが少なくないが、ここでも自分を打ち出す現実の雫の動きとも重なっているのではないか。また、あえてバロンに袖にされるというストーリーが生み出されたのも、男性に頼らず主体的に生きるという動きの1つの現れと見ることも可能だろう。

また、大塚(2015)は、『『行って帰る』物語構造ではなく、ひたすら一直線の物語、いわば帰路だけの物語としてある』と、本作への批判的な見解を呈している。しかし、この入れ子的な物語の中で「行って帰る」動きが達成され、主体性が回復されていく。実際に、執筆前後で雫はガラリと変わったのである。この物語を書くこと自体に、いわば自己治療的に自らの欠落を埋める働きがあったと考える。

7. 物語のおわり

1) 「故郷に帰らない」という主題

物語の終わりは、始まりの夜景と対比的に、眩しい朝焼けを一望しながら、雫と聖司が丘の上で将来を誓い合う。その後、カメラは地上に降り、朝の中学生のにぎやかな登校、そして下校シーンが映し出される。これらは、地上の固定カメラで仰ぎ見る画角で捉えられ、彼らが日々、登下校を繰り返しながら生きている姿が収められるのだ。

背景には、雫が作詞した日本語版の「カントリーロード」が流される。

『耳をすませば』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

その歌詞も対照的である。

どんな挫けそうな時だって 決して 涙は見せないで
心なしか 歩調が速くなっていく 思い出 消すため
カントリーロード この道 故郷へつづいても
僕は行かないさ 行けない カントリーロード
カントリーロード 明日は いつもの僕さ
帰りたい 帰れない さよなら カントリーロード

冒頭のオリビア・ニュートン・ジョンの“Take Me Home, Country Roads”では、慕る望郷の念が真っすぐに歌われていた。しかし、雫の「カントリーロード」ではベクトルの向きが真逆に転換する。「この道故郷へつづいても 僕は行かないさ」と故郷に戻らない意志が歌われるのである。決して「帰りたくない」、そんなわけではなく「帰りたい」。しかし、もう「帰れない」のである。そして故郷に「さよなら」を告げ、「どんな挫けそうなき時だって 決して 涙は見せないで」頑張る決意が歌いあげられる。

ここでの「故郷」は、大人や家庭に庇護してもらえる場所であり、また親や環境に包まれるような関係性とも読み解けるだろう。自立的に生きようとするなら、もう「故郷」に回帰することはできない。また創造的に生きようとするなら、親や大人が敷いたレールを後押しされながら受動的に進むことは許されない。その意味で、この歌は退路を断って理想への道なき道を自ら切り開く、そんな決意表明の歌だと言えるだろう。

この映画を通して、雫は足がすくんで一歩も動けない状態から、自らの夢に向かう一歩目を踏み出した。ただ、それは原石を磨くための長い道のりのわずか一歩目に過ぎず、ここから「しんどい」そして「手間がかかる仕事」が必要とされる。いわば0歩から1歩であり、量的な視点ではたかが一歩に過ぎない。しかし、質的な視点では「無から有」であり、無限大

の変化だと言えるだろう。

2) 「登校」と「下校」のシーンから

それでは、なぜ学校の登下校シーンが最後に描かれているのか。「カントリロード」では、もう「帰れない」ことが歌われていたのに、坂を下りて下校、つまり家に帰るシーンも描かれるのである。

筆者には、これは当然なことだと思える。1回の契機で、一気に自立が達成されることは決してない。われわれは、日々の生活の中で小さな「自立」と「帰還」を気が遠くなるほど繰り返しながら、自立へ向かっていく。また創造的な生き方は、高い理想を掲げる一方、現実に立ち返り、足元を固める努力をする、そんな繰り返しでしか達成できない。だからこそ、坂を登って「登」校する「高みへの上昇」と、坂を下って「下」校する「現実への下降」という主題が最後にもう1度描かれたと考える。

おわりに

本稿では、『耳をすませば』を題材に、主人公の雫の成長を支えた周囲の関わりについて心理臨床学的な視点から検討をおこなった。思春期は、子どもから大人へと変化する激動の時期であり、その中で思い悩み不安定になることも多い。

本稿では、雫に対して周囲がいかに関わったかを心理臨床学的に検討する中で、家族や友人、知人の関わりを詳細に検討した。そこでは、共通して彼らの心情を理解した上で必要な関わりをする重要性が浮かび上がった。その理解の上で、心的なエネルギーを用いながら各自の個性を生かして関わることで、多層的な支援が可能になると考えた。

今回『耳をすませば』を読み解いて改めて感じ入ったのは、この作品自体の持つ力と周囲の卓抜な関わり、そして何より、夢に向かってひたむきに邁進する2人の歩みである。もちろん、こうした歩みは映画という虚構

『耳をすませば』における支援のありかたに関する心理臨床学的探求の試み

の世界だけではない。筆者は、心理臨床の現場で数多くの思春期の少年たちと出会ってきたが、時代は変われど、そうした名もなき「普通」の少年たちは今もひたむきに生きている。

彼らの歩みに耳をすませば、自ら退路を断って道なき道を進む、彼らの懸命な足音が聞こえてくる。

文 献

- 広沢正孝(2015)学生相談室からみた「こころの構造」. 岩崎学術出版社.
- 井上ひさし(2015)月島雫はなぜ「開発」と書いたか. ジブリの教科書9 耳をすませば. 文春ジブリ文庫.
- 河合隼雄(2003)紫マンダラ. 講談社 a 文庫.
- 川本三郎(2015)多摩で育った新しい子供たち. ジブリの教科書9 耳をすませば. 文春ジブリ文庫.
- 近藤喜文(2015)はくらが「耳」で伝えたかったこと. ジブリの教科書9 耳をすませば. 文春ジブリ文庫.
- 宮田浩介(2020)旅立ちとふるさとの始まり. 多摩美術大学研究紀要第35号.
- 村上春樹(1996)村上春樹, 河合隼雄に会いに行く. 岩波書店.
- 大塚英志(2013)ストーリーメーカー. 星海社.
- 大塚英志(2015)『耳をすませば』 解題. ジブリの教科書9 耳をすませば. 文春ジブリ文庫.
- 須藤春佳(2010)前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究. 風間書房.
- 須藤春佳(2011)親友関係の光と影. 神戸女学院大学論集第58号第2号.
- Sullivan,H.S.(1953)The Interpersonal Theory of psychiatr. 中井久夫他(訳)精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 田中康裕(2017)心理療法の未来 その自己展開と終焉について. 創元社.

Exploring ways to psychoclinically support “Whisper of the Heart”

KOYAMA, Tomoaki

Abstract

“Whisper of the Heart” is an animated film produced by Studio Ghibli and distributed by Toho. This study aimed to examine the growth of the protagonist, Shizuku, a junior high school student, and how the people around her supported her, from a psychoclinical perspective. Adolescence is a period of significant change from childhood to adulthood. Adolescents tend to be insecure, confused between the ideal and reality, and are unable to directly consult adults regarding their struggles as they enter a period of rebellion. How can we get involved with these adolescents?

In the film, although Shizuku dreamt of writing a story, she was unsure of her talent and sometimes felt depressed in the face of limitations. I believe that the psychoclinical understanding of how people around the distressed Shizuku treated her will help support such adolescents.